

新 潮 文 庫

高村光太郎詩集

伊 藤 信 吉 編



新 潮 社

高村光太郎詩集



定価 110 円

新潮文庫

昭和二十五年十一月二十日 発行
昭和四十三年二月二十日 三十三刷改版
昭和四十三年八月二十日 三十四刷

編者 伊藤信吉

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

高村光太郎詩集

伊 藤 信 吉 編



新 潮 社 版

目次

「道程」、その他

失はれたるモナ・リザ	三
生けるもの	一五
根付の国	一五
食後の酒	一六
寂寥	一七
声	一九
父の顔	二三
泥七宝	二四
犬吠の太郎	二六
さびしきみち	二九

冬が来る	三
狂者の詩	三
山	三
冬が来た	三
道程	三
五月の土壌	四
秋の祈	四
*	
わが家	四
花のひらくやうに	四
無為の白日	四
小娘	四
丸善工場の女工達	五
雨にうたるるカテドラル	五

ラコツチイマアチ	五九
米久の晚餐	六〇
クリスマス夜の	六一
真夜中の洗濯	六二
下駄	六三
五月のアトリエ	六四
沙漠	六五
落葉を浴びて立つ	六六
鉄を愛す	六七
新茶	六八
「猛獣篇」、その他	
清廉	六九
白熊	七〇

鯨	九二
象の銀行	九三
苛察	九四
雷獣	九五
ぼろぼろな駝鳥	九六
*	
月曜日のスケルツォ	九七
氷上戯技	九八
車中のロダン	九九
後庭のロダン	一〇〇
葱	一〇一
ミシエルオオクレエルを読む	一〇二
火星が出てゐる	一〇三
冬の奴	一〇四

怒……………	二四
二つに裂かれたベエトオフエン…	二五
花下仙人に遇ふ……………	二七
母をおもふ……………	二八
北東の風、雨……………	三〇
天文学の話……………	三二
平和時代……………	三二
或る墓碑銘……………	三三
冬の言葉……………	三三
当然事……………	三五
さういふ友……………	三六
あの音……………	三九
焼けない心臓……………	三〇
首の座……………	三二

上州湯檜曾風景……………	一三二
或る筆記通話……………	一三三
激動するもの……………	一三三
上州川古「さくさん」風景……………	一三四
孤独が何で珍らしい……………	一三六
刃物を研ぐ人……………	一三六
のつぽの奴は黙つてゐる……………	一三七
似顔……………	一三九
霧の中の決意……………	一四一
非ヨオロッパ的なる……………	一四二
もう一つの自転するもの……………	一四三
ばけもの屋敷……………	一四四
村山槐多……………	一四五
鯉を彫る……………	一四六

荻原守衛……………一四七

孤坐……………一四九

「大いなる日に」

「記録」、その他

「をぢさんの詩」

地理の書……………一五三

へんな貧……………一五五

最低にして最高の道……………一五九

百合がにほふ……………一五九

*

独居自炊……………一六二

美しき落葉……………一六三

*

手紙に添へて……………一六三

新緑の頃……………一六五

蟬を彫る……………一六六

「智恵子抄」

郊外の人に……………一七〇

冬の朝のめざめ……………一七二

深夜の雪……………一七四

人類の泉……………一七六

人に（遊びぢやない）……………一八〇

僕等……………一八二

晚餐……………一八五

樹下の二人……………一八八

金……………	一九〇
夜の二人……………	一九二
あどけない話……………	一九三
同棲同類……………	一九三
人生遠視……………	一九四
風にのる智恵子……………	一九四
千鳥と遊ぶ智恵子……………	一九五
値ひがたき智恵子……………	一九六
山麓の二人……………	一九七
レモン哀歌……………	一九九
亡き人に……………	二〇〇
梅酒……………	二〇一
荒涼たる帰宅……………	二〇三

「典型」、その他

雪白く積みめり……………	二〇六
「ブランデンブルグ」……………	二〇七
人体飢餓……………	二一一
悪婦……………	二一五
月にぬれた手……………	二一六
鈍牛の言葉……………	二一八
典型……………	二二〇
田園小詩……………	
山口部落……………	二二三
クロツグミ……………	二二三
クチバミ……………	二三四
別天地……………	二三五

解説

	*
ヨタカ……………	三六
女医になつた少女……………	三七

伊藤信吉

山の少女……………	三六
山のともだち……………	三九
十和田湖畔の裸像に与ふ……………	三二

高村光太郎詩集

「道

程」、

その他

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり

かの不思議なる微笑に銀の如き顫音せんおんを加へて

「よき人になれかし」と

とほく、はかなく、かなしげに

また、凱旋がいせんの將軍の夫人が偷視ぬすみの如き

冷かにしてあたたかなる

銀の如き顫音を加へて

しづやかに、つつましやかに

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

深く被おほはれたる煤色すすいろの仮漆エ、ルニこそ

はれやかに解かれたれ

ながく画堂の壁に閉ぢられたる

額ぶちこそは除かれたれ

敬虔^{けいけん}の涙をたたへて

画布^{トワアル}にむかひたる

迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ

ああ、画家こそははかなけれ

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

心弱く、痛ましけれど

手に権謀の力つよき

昼みれば淡緑に

夜みれば真紅^{しんく}なる

かのアレキサンドルの青玉^{せいぎよく}の如き

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

我が魂を脅し

我が生の燃焼に油をそそぎし

モナ・リザの唇はなほ微笑せり

ねたましきかな

モナ・リザは涙をながさず

ただ東洋の真珠の如き

うるみある淡碧うすあをの齒をみせて微笑せり

額ぶちを離れたる

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

かつてその不可思議に心をののき

逃亡を企てし我なれど

ああ、あやしきかな

歩み去るその後うしろかげの慕はしさよ

幻の如く、又阿片を燐やく烟けむりの如く

消えなば、いかに悲しからむ

ああ、記念すべき霜月の末の日よ

モナ・リザは歩み去れり

生けるもの

何事も戯たはむれにして、何事も戯ならず

戯ならずと言はむにはあまりに幼し

戯なりと言はば自ら悲しみづか

我も生けるものなり

公園に散る新聞紙の如く

貧く、あぢきなく、たよりなく

雨にうたるまで

生けるものをして望むがままに生かしめよ

根付の国

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫つた根付ねつけの様な顔をして
魂をぬかれた様にぽかんとして